

このトンボは、同定が容易であること、日中に活動し出現期が長いことなど、学校で扱う学習素材として適している。

ミヤマアカネという「タレント」を売り出すにあたり、私は、少し大きすぎたが「日本でいちばん美しい赤とんぼ」というキャッチコピーをつけ、新聞紙上で情報を募集したのち、「夏期教職員セミナー」で説明し、宝塚市内の小学校で「総合的な学習の時間」の素材として取り上げてもらった。昨年度は二校、今年度は三校がミヤマアカネ学習に取り組んでいる。彼女らには、「キミたちも研究員となつて、私と共同研究していただきませう」と鼓舞した。子どもたちは、ひんぱんに校区に出て、それまで存在に気づかなかったトンボが身近にいることを発見し、手にとり、毎日のように観察し、仮説をつくり、論文を書いた。地図を読めるようになったし、エクセルの表計算や、パワーポイントでのプレゼンテーションまで学習した。

彼ら彼女らは自宅で体験を話す。その結果、兄弟姉妹や保護者も関心をもつたろう。せつかく関心をもった相手を放置しておくのはもったいない。そこで、学校教育から一歩外へ出てみんなミヤマアカネを楽しもうという「みやまあかね祭」を企画した。

はやりきたりとなった博物館に多くの人が詰めかけるはずはなく、専門家の講演会も、大学が力を入れる生涯学習事業で事足りてくる。学術標本資料の整理保管という博物館の第一の役割も、置かれている状況は同じである。モノの貴重性を理解する人は、放つておいて現れるものではない。ましてや学問が細分化された現代ではなおさらである。東京ディズニーランドの一人勝ちのように、莫大な予算を動かすことが認められる一部の巨大館でなければ、昔ながらのビジネスモデルは成立しないだろう。

ミュージアムの長所は、いろんな人との関係を自在にプロデュースでき、自身のあり方も比較的自由であることである。目玉商品も予算も乏しい「ひとほく」のような地方博物館は、原点に帰って、いい素材を発掘し、それをひびきかけて地道に仲間づくりをしてゆくしかない。裏を返せば、サービスを拡大再生産するような構造をあらかじめ内包しておかないと、いずれこれもが見向きもしくなくなるということになる。私が年間一〇〇〇人にサービス提供するとして、一〇年やれば一万人だ。しかし、一緒にサービス提供する仲間が増え、それによつてサービス提供力が年間二倍になるとすれば、一〇年間で一〇〇万人を超え

関心をもった児童の保護者が名乗りを上げてくださり、「みやまあかね委員会」という名の「ひとほく」連携活動グループとして、イベントの企画運営にあたつている。夏休みの終わりにころには、このはじめての企画が実現しているものと思ふ。関東地方に転校した児童も、この日には家族で帰ってくるらしい。仲間内では「何年か続けて、同窓会のような場になつたいいね」と言っている。子どもたちの輝く目は、兄弟姉妹や保護者を引きずり出すパワーをもっているのである。

ミヤマアカネの存在は、「総合的な学習の時間」で取り組んだ児童が二年間で五〇〇人だから、そこに保護者や兄弟姉妹を加えると、すでに二〇〇〇人くらいに認知されているだろう。「みやまあかね委員会」には、年々新たなメンバーが加わるはずである。学校から保護者を経て地域へ、関心者のリプロダクションが動き始めている。

人をよぶのは人

世のなかにはめずらしいものがなくなつた。海外旅行は手軽になり、インターネットには情報満載、かつて昆虫少年が空想に耽つた外国の巨大カブトムシもペットショップで売っている。も

る相手にサービス提供できることなる。実際にはこのような数字はありえないが、原理が単純だとすると、利息と同じで、仲間づくりを少し心がけるかどうかで、年月が経てば経つほどその差は拡大し、気づいたときには大富豪になつているか、取り返しのつかないことになつているかのどちらかである。

大富豪になるためには、当事者がリプロダクションの必要性を意識しさえすればよい。仲間づくりの過程において、多くの利用者の声が、博物館の事業内容に「く自然にフィードバックされてくるだろう。そうならば、市民が館に要望書を提出したり、館が半ば内部対策的に「利用者の声をきかせてください」とアンケート調査をする必要もなくなり、ほんとうの意味でのみんなのための博物館が実現するように思う。傲慢、妄言かもしれないが、ときには原点に戻つてみることも必要だと思ふ。

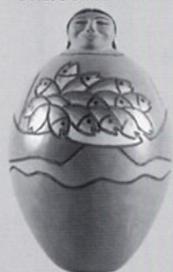
注1「ひとほく」連携活動グループ

「ひとほく」と連携してさまざまな市民サービスを実施するグループ。セミナーの終了後、グループとなり、現在九団体を登録。研究員がアドバイザーとなり、責任をもつグループをコーディネートする。注2 テナント (tenant) (成金になること) 直後の昆虫類において、羽化(成虫)の状態をいう。高校生の表紙の確化(成虫)の状態をいう。高校生が自らの状態をたどることを命名したのも。

表紙モノ語り 水族がかきたてる想像力

企画展「みんぱく水族館」出展作品/チルカナスの焼きもの(高さ45.6cm、直径28.6cm)、ティンガティンガ絵画(縦61cm、横59cm)、ほか2点

野林 厚志
文化資源研究センター



食物連鎖の頂点に立つ人間にとつて、魚や貝、エビ、カといった水族は、自然が与えてくれる恵みとして世界中のいたるところで食されてきた。いっぽうで、それぞれの土地の人のびとは、自分たちの利用している水族が、どんな色や形をし、どのような能力をもち、どのように活動しているかなどを十分に熟知してきた。人びとは水族を、衣・食・住のなかでただ利用するだけでなく、時には畏敬の念をもつて、折りや

祭りの対象としてきた。このようにして精神面でも人びとを支えてきた水族とのつきあいの様子は、しばしば絵画や造形物のモチーフに使われる。古くは日本の縄文土器に、鱈の頭をつつこんだサケと思われ魚の姿が描かれている。また、新しく生まれきたた芸術のなかにも水族と人間とのつきあいが大切なモチーフとなつていることも少なくない。表紙右側にあるものは、ペルー北部のチルカナスという場所



つくれた土器である。チルカナスの焼きものは、今から三〇年ほど前に現地の若い職人が、インカ時代あるいはそれ以前の焼きものの技術を再現したものである。表紙の背景になつている絵画は、タンザニアのティンガティンガ絵画とよばれるものである。ティンガティンガ絵画は一九六〇年代に、タンザニア南部のトゥンドール地方出身の若者が描いていた動物や植物をモチーフにした

絵から出発したものである。今ではアフリカのポップアートとして有名になっている。地域を越えて同じ時期に生まれた(二)の新しい創造に、人間と魚との関係がモチーフとして使われているのは単なる偶然なのだろうか。明確な理由はすぐには見つけられずともないが、時代や地域を越えて、水のなかに棲む生物が人間の想像力をかきたててきたことだけは確かである。



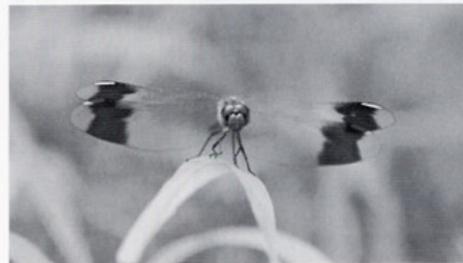
昆虫を採集するトラップのしかけかたの指導。高校生のお兄ちゃんがクワを使って穴を掘ってくれている



昆虫の標本をつくる小学生。昆虫は乾燥状態の標本とする。昆虫の体はこれくらいきれいな標本をつくるには、かなりの訓練を要する



宝塚市立仁川小学校の実習。研究員が学校を訪問し、講義や実習をおこなうこともしばしばだ



ミヤマアカネ。オスは全身が鮮やかに赤く色づき、美しい。翅に褐色のストライプが入っているのが特徴

未来へひろく
ミュージアム